

大学通信教育部における相談援助実習への取り組み

高橋 昌子

Efforts toward Consultation Support Training in a Correspondence Course of University

Masako TAKAHASHI

要 旨

社会福祉士養成教育の内容が大幅に見直された相談援助実習では、実習中、実習生は毎週1回実習指導教員からの対面指導を受けるという帰校日指導が新たに設けられた。本稿では、通常、対面指導の少ない通信教育部において、本実習を終えた実習生へのアンケート調査をもとに考察した帰校日指導の効果から、始まったばかりの相談援助実習を考える。

キーワード：社会福祉士、相談援助実習、相談援助実習指導、新カリキュラム、帰校日指導

はじめに

新カリキュラム導入により社会福祉士養成校では相談援助実習が本格的に始まった。養成校と実習先は、より質の高い社会福祉士の養成に向けて新体制のもと、実習生への指導に対してこれまで以上に連携を図りながら取り組んでいる。そうした指導のなかでも、新たに設けられた帰校日指導に注目し、特に、通信教育部を有するA大学の取り組みについて考察を加える。

1. 研究目的

社会福祉士養成校では新カリキュラムでの相談援助実習（以下、本実習）が本格的に始まり、A大学においても通学、通信共に体制を整え、本実習に取り組んでいる。新たに設けられた帰校日指導について本稿では、通信教育部における本実習への取り組みを帰校日指導のアンケートを通して考察するものである。

社会福祉士の実習教育においては、実習生が学習しなければならない内容が大きく変わってきている。それは、実習指導の内容の変化であり、2007年12月の社会福祉士及び介護福祉士法改正法

の成立による新カリキュラムでの、実習と演習教育内容の充実においても示されている。より実践力の高い社会福祉士を養成するために、現場における相談援助の知識及び技術を活用して実習と演習教育が行われることを求められるようになった。実習は明確な目標をもつ教育活動であるから、実習教育の責任は第一義的には養成校にあるといえる。このため、今回の法改正により、実習・演習担当教員について、原則として5年以上の実務経験を有する社会福祉士や一定の教歴を有するものであることとされ、それ以外の者については実習・演習担当教員講習会を受講することが義務づけられた。これまでの社会福祉士の実習教育では、養成校と実習先との実習内容の事前の打ち合わせが不十分であったり、実習中の学生に対する養成校の指導や実習先との連絡が適切に行われていなかったことが指摘されてきた。本稿では、実習中の学生への指導の大きな変更点である帰校日指導について、通信教育部の実習生への効果と課題を考察することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

A大学の通信教育部において、2010年と2011年に本実習を実施した学生24人に対して行なった帰校日指導に対するアンケート調査結果と、学生の実習への取り組みを通して、相談援助実習における帰校日指導について考察した。

尚、本アンケートは、本調査の趣旨に同意した学生のデータのみを使用している。

(2) 調査対象の属性

①性別：女性19人、男性5人

②実習先種別（実習先2箇所の学生を含む）：特別養護老人ホーム10人、地域包括支援センター6人、障害者通所授産施設4人、福祉事務所2人、

養護老人ホーム1人、児童養護施設1人、病院1人

3. アンケート結果

調査対象 24人 有効回答率 100%

(1) 指導を受けている自分に対する評価（図1）

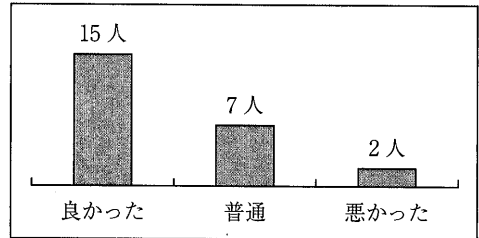


図1 指導を受けている自分に対する評価

表1 帰校日指導を受けている実習生の自己評価の理由

良かった点	問題点
指導内容を意識し、活かしながら実習を続けることができた	指導を上手く実習に活かすことができない場合があった
指導を受ける重要性を学び、実習に集中できた	説明が適切にできなかった
安心して実習に臨むことができた	新しいシステムのため、実習先が困惑していた
記録の未熟さに気付いたが、細かい添削指導により徐々に改善できた	指導を受けても客観的な記録に上達しなかった
色々と工夫した指導内容であった	記録の誤字・脱字の修正が徹底できなかった
実習計画やプログラムの視点から外れることがあっても修正することができた	
帰校日の前日にそれまでの実習を自分なりに振り返ることができた	
自分の欠点を知ることができ、社会福祉士について理解が深まった	
自分に対する気付きが多く、自分と向き合うことができた	
不安や悩みを教員に素直に打ち明けることができ、自分の感動や感情を伝えることができた	
他の実習生と共感、励まし合いができ、リラックスできた	
充実した時間であった	

(2) 自己評価の理由（自由記述）（表1）

(3) 帰校日指導の効果（図2）

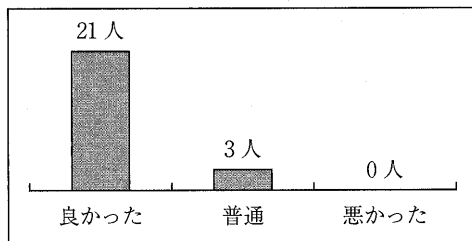


図2 帰校日指導の効果

(5) 実習巡回指導・帰校日指導内容記録の記入について（図3）

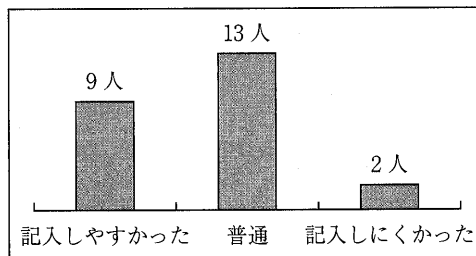


図3 実習巡回指導・帰校日指導内容記録の記入について

(4) 効果に対する理由（自由記述）（表2）

(6) 記入に対する評価の理由（自由記述）（表3）

表2 帰校日指導の効果に対する理由

良かった点	問題点
実習日誌の記入では感想を考察に導く指導が効果的であった	指導を考えすぎた結果、実習の方向性を見失うことがあった
記録の指導が役立ち、要点をまとめて記入することができた	社会人であるからと、感情を抑えることがあった
実習態度に自信をもつことができた	
1週間ごとの指導を活かして次週からの実習に必ずつなげることができた	
いつも励ましてもらえたので意欲的に実習に臨めた	
悩みや迷い、不安や疑問などにもすぐに対応してもらえて安心できた	
実習日誌の書き方、実習の取り組み方に対して軌道修正できた	
実習に対する視点を明確に再認識できた	
ゆっくりと自分を見直すことができた	
自分の気付かない点や傾向を修正できたので実習内容を整理することができた	
良い点を評価されたり、モチベーションが上がり意識向上につながった	
他の実習生との情報交換ができた	
もっと指導日があってもよかったと思う	
精神的に安定した	
実習内容の変更を実習指導者に教員から伝えてもらえて助かった	
実習日誌が上達した	

表3 実習巡回指導・帰校日指導内容記録の記入に対する評価の理由

肯定的理由	否定的理由
特に書きにくいことはなく、もっと欄が多くてもよい	指導者からの評価の欄は、客観的な記述が書きにくかった
実習記録の書き方や実習への姿勢に有用できた	内容が重なる欄や時があった
状況整理と翌日からの課題につながった	どのように書こうか、形にこだわってしまった
実習ノートで迷う実習生が多いので指導が学びにつながってよかった	記録内容の項目が多かった
実習内容を文章化することで自分を客観的に分析できた	実習の達成状況と、実習生としての総合的学びの内容が似かよってしまった
3段階評価は状況を把握しやすかった	自己評価の文章化が難しかった
具体的な説明や指導は理解しやすかった	実習生の心身状況が書きにくかった
回を重ねると自然に書きたい内容が記述できた	実習先に提出すると指導内容を確認できなかった
とても分かりやすく、シンプルなものであった	
文章能力不足がわかり、今後の記述に役立つ	
考え方や見方を整理するのに適切な記入構成と項目であった	
指導されたことをすぐ記入する方法は良かった	

(7) もし、帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたと思うか（自由記述）

- ・自分自身の学びの成長を実感できない実習になっていたと思う。
- ・帰校日指導で実習目標に対する学びを深め、軌道修正できたので、帰校日がなければ学びが少なかった。
- ・長期間の実習で考え方を間違えたまま終えてしまったり、励ましがなかったら心身ともに疲れて実習に耐えることができなかったかもしれない。
- ・自分独自の主観で実習を進め、視野が狭くなり、学びの視点が明確でなかったと思う。
- ・巡回指導を早めに来てもらえると効果があるように、毎週の帰校日指導により実習に深みももてた。実習中の問題や悩みを解消するためにも、帰校日指導を今後もぜひ続けてほしい。
- ・遠方の実習生にとっては時間的、費用的に負担となるが、モチベーションを保つためには役立つと思う。

- ・教員からの指導と、同時期の実習生との話し合いで実習に対する視点を修正できた。
- ・実習中に他の学生と会えることは大変さを共有でき、孤独感が軽減された。
- ・緊張や不安が大きく、モチベーションが下がって、実習計画の見直しもできなかったと思う。
- ・積極的な実習の取り組みにならなかったかもしれない。
- ・実習指導者に話ができない内容も、教員には打ち明けることができ、大きなストレス解消になった。
- ・記録の基本的な指導をしてもらえたので、帰校日がなかったら記録の上達はなかったと実感している。
- ・実習日誌の記入は言葉の選別に気付かず、中学生のような感想文のまま書き終えていたかもしれない。
- ・遠方で実習先が職場であったが、帰校日のおかげで内容の深い実習になった。
- ・振り返りができず不安や心配ごとを抱えたまま実習を続け、ステップアップできなかったと思

う。

- ・変化のない単調で意欲のない取り組みで終了していたと思う。
- ・実習時間をこなすだけで、自分だけの考え方で実習を進めていたのではないと思う。
- ・社会人としての配慮や表現方法の修正の必要性を感じなかったのではないかと考える。
- ・帰校日指導で指摘されなかったら、介護中心の実習が続いていたかもしれない。

4. 考察

上記の結果より、図1で示したように帰校日指導を受けた実習生の自己評価は、24人中22人が「良かった」と「普通」であり、ほとんどの実習生は積極的にまじめに帰校日指導を受けたことを裏付けている。毎回の指導により自己覚知や実習の再確認ができ、帰校日指導以降の実習に活かされていたことが表1から考察できる。また、1週間ごとの指導は、実習中の悩みや不安を解消することに役立ち、教員だけでなく、他の実習生との情報・意見交換もリラックスできる環境づくりに活かされていた。こうした総合的な学びは帰校日指導が充実した時間であったと実習生が捉えるまでに至っている。しかし、指導を上手く活かすことができなかつたり、記録に関する指導を受けても上達しなかつたこと、自分の説明能力の不足等を理由に自己評価の低い実習生に対しては、より効果的な指導内容の検討が必要であった。こうした実習生に対して本実習教育では、実習の進行に合わせて実習スーパービジョンが行われる。実習開始前、実習中、そして実習終了後に定期的に行われるスーパービジョンのなかで、実習中に実習指導教員が行うスーパービジョンとしては、巡回訪問指導時と帰校日指導時である。その他に、実習生や実習先からの要請によりスーパービジョンを適時行なうこともある。その際のポイントとして村井は、「いずれの機会においても実習先のスーパービジョンとの整合性を図ることです。それが図られなければ、実習生は混乱します。配属実習中のスーパービジョンは、実習先のスーパー

バイザーとの連携、役割分担の確認がポイントになります。』¹⁾としている。カリキュラム改定によりスーパービジョンは実習プログラムのなかに位置づけられ、養成校と実習先ともに実習スーパーバイザーを配置しなければならなくなった。しかしながら、本アンケート結果では、新たな取り組みとなった帰校日指導が実習先で適切に認識されておらず、実習生の自己評価を低くしていたことも判明した。前述の指導内容の検討に加え、養成校と実習先との連携のあり方についても課題が浮かび上がった。

次に、図2では帰校日指導が本実習において効果的であったことが示されており、帰校日指導を重ねる度に、指導の手ごたえを強く感じた。表2からは、大きく分けて2つの効果が見出せる。実習への取り組みの再確認、実習中の悩みや問題解決等の精神的安定、指導での評価が実習のモチベーションをあげる等、実習に臨む姿勢に対する効果と、実習日誌等の記録への指導の効果である。実習中は精神的に不安定であったり、様々な悩みや問題に直面することが多いが、その解決方法として帰校日が大きな役割を果たしているといえる。しかし、社会人である通信教育部の学生にとって、悩みを打ち明けにくく、感情を抑えて帰校日に臨んだ実習生もあり、精神的安定を図る環境作りにも工夫が必要である。柳澤は「自分の持ち味を發揮できる“自分らしい”ソーシャルワーカーになるためには、援助活動の中で味わうさまざまな喜怒哀楽、苦勞、挫折、工夫、等々の経験を、自分の主観的世界の中にだけ閉じ込めるのではなく、援助者仲間、場合によっては利用者とともに、さまざまな角度から検討し合い、切磋琢磨していくことが求められる。それは、援助活動における主観的体験を共同主観的認識にまで高めていく努力の中で、ソーシャルワーカー自身が援助者としての成長を見込めることを意味する。』²⁾と述べている。福祉専門職を目指す実習生にとって、実習指導教員や同じ実習生と対面できる帰校日は、柳澤の指摘する主観的体験を共同主観的認識に高めるという効果を見出すことができよう。

記録に関する効果については、通学、通信生にかかわらず、毎日提出する実習日誌の記入に苦慮する実習生は多い。そのため、実習中においては実習巡回指導の際にのみ実習日誌の指導を受けるという旧カリキュラムとは異なり、毎週の帰校日指導で実習日誌の指導を受ける新カリキュラムでは、指導回数が大幅に増えたことになった。その結果、記録の上達が顕著に表れたことは、帰校日指導の大きな効果である。相談援助実習の評価では、記録に対する価値が重要視される。阪野は、ノートの役割を次のように示している。「ノートの役割は、いわば外部記憶装置としてのメモノートと、学習の状況をリアルに記録する学習ノートという2つの役割があるが、学び方の評価のためには『何を』『どのように』学びつつあるのか、その問題把握と解決方法を記録するノートであることが求められる。ノートは自分の学習そのものが跡づけられた記録であり、学習者自身の個別的な学習活動の痕跡そのものである。自ら学ぶ力の評価は、このような記録によって信頼できるものとなる。」³⁾としている。高梨も「配属実習中、最も実習生を悩ますのが実習日誌ではないだろうか。しかし、実習日誌は、配属実習中の実習生を映し出す鏡であり、実習が実習であるためになくてはならないものである。」⁴⁾と指摘する。筆者が作成に携わった実習ノート^(註1)に関しても、山本は、実習日誌について「日々の学びの証拠となる重要な様式書類である。意義として、実習生のための実習内容のリフレクションと、実習先・養成校のための実習マネジメントの根拠の2つを見ることができる。」⁵⁾としている。実習プログラムの点検や再確認、実習先からのスーパービジョンの活用、実習に対する振り返り等、記録の役割は大きい。その指導に時間を費やすことができたことは帰校日指導の大きな効果であることを実感した。

図3と表3の「実習巡回指導・帰校日指導内容記録の記入」については、学生によって記入のしやすさには差があった。記入しやすかった理由として、適切な記入様式と、具体的指導が功を成し

ていたようであり、わかりやすくシンプルであった、3段階評価の形式は把握しやすかった、翌日からの実習に役立つ等の指摘があった。その反面、記入しにくい理由として、記録内容が多かったという指摘や、記入しにくい欄として実習先の評価や実習生の心身状況、実習の達成状況の欄が挙げられた。こうした項目の再検討と本記入に対する事前指導が課題と考えられるが、前述の記録への指導の効果を活用した指導内容も参考にする必要がある。

最後の、「もし、帰校日指導がなかった場合、実習への取り組みはどう変わっていたと思うか」に対する自由記述により、実習生から新カリキュラムにおける帰校日指導の効果が大きいと評価されていることがわかる。長期間の実習での学びに対する軌道修正や気付き、教員や他の実習生からの指導とアドバイスによる心身の疲れの軽減、モチベーションのモチ方等の変化は、実効的な実習を目指す新カリキュラムの方針に沿ったものである。実習生の抱える大きな問題の1つとして挙げられる実習ノートの指導についても、従来に比べて丁寧に時間をかけて行うことができたことも効果的であった。但し、通学生とは異なり、遠方から帰校日指導のために毎週1度は大学に通ってこなければならなかった通信生にとっては、時間的、経済的負担は大きいものとなっている。帰校日指導があったからこそ、本実習を成功裡に達成できたとはほぼ全員が考えているのだが、体力、時間、経済的問題への解決方法は、新カリキュラムが始まったばかりの現状ではまだ見出されていない。本稿では、通信生を対象として研究したが、ほとんどの実習生が社会人であり、仕事や家庭と両立しながら実習を進めるためには、通信生に適した帰校日指導の形態も必要かもしれない。山手と内保は「経済不況が続き企業の求人が少数精鋭主義となって教養教育や経済経営分野の教育を受けた卒業生の就職率が低下した時期から、少子高齢社会のニーズに対応する保健・医療・福祉専門職を養成する大学・学部・学科の増設傾向が著しくなっている。」と指摘し、保健・医療・福祉専門

職の質的向上と量的増加が不可欠の教育課題になってきたと強調する⁶⁾。実習先と養成校との連携については、実習生からの毎回の報告により実習指導教員が実習内容等を正しく把握することができ、実習生からの要望や質問等に対しても、実習先への問い合わせの仕方を具体的に教員が指導することにより、適切に実習先へ伝わるという連携の効果も表れている。しかし、全ての実習先で実習指導者と実習指導教員の連携が図られていたとは言い難く、実習前、実習中、そして実習後の適切で効率的な連携システムも今後、実習先に合わせて考える必要がある。魅力ある社会福祉士を目指す実習生にとって、本実習指導も魅力あるものでなければならない。

おわりに

社会福祉士養成校の間には大きな格差があり、それぞれの養成校の歴史や経営状況、そして教育と研究の条件などの要件が考えられる。ソーシャルワーク研究を活かし高い専門性をもつ社会福祉士養成に携わっている養成校と、受験資格取得を大きな目的として取り組んでいる養成校等様々であろう。社会福祉士養成教育の目的は、社会福祉士国家試験合格がゴールではなく、取得した社会福祉士の資格を活かし専門的な社会福祉活動ができる力を養うことである。新カリキュラムの開始により、本実習内容や取り組みの充実が図られ、より実効性の高い社会福祉士養成を求められる。今、専門性の高い実習指導教員と実習指導者による相談援助実習への期待に応えられるよう、今後も本実習教育に取り組んでいく所存である。

注1) 兵庫県社会福祉士会 実習教育支援委員会における養成校実習担当教員としての委員、ならびに同委員会「社会福祉実習におけるミニマムスタンダードのあり方研究会」での「実習ノート検討部会」部会長としての係わり

引用文献

- 1) 村井美紀 (2009) 「配属実習中のスーパービジョン」社団法人日本社会福祉士養成校協会編「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト」中央法規出版218
- 2) 柳澤孝主 (2009) 「相談援助と実習教育」柳澤孝主・坂野憲司編集「相談援助の基盤と専門職」弘文堂204
- 3) 阪野 貢 (2006) 「学び方の評価とその記録」阪野貢監修「福祉教育のすすめ理論・歴史・実践」ミネルヴァ書房56
- 4) 高梨未紀 (2010) 「第3章第2節実習記録」加藤幸雄・小椋喜一郎・柿本誠・ほか編「相談援助実習ソーシャルワークを学ぶ人のための実習テキスト」中央法規出版119
- 5) 山本秀樹 (2011) 「第5章第2節実習記録」兵庫県社会福祉士会監修「ソーシャルワーク実習養成校と実習先との連携のために」久美株式会社88
- 6) 山手 茂・内保美穂 (2007) 「第5章社会福祉士養成教育の現状と課題」山手茂・園田恭一・米林喜男編「保健・医療・福祉の研究・教育・実践」東信堂68